

法上の「人道に対する罪」として、金正恩朝鮮労働党委員長へ責任追及を求めた申立書を日本人で初めて提出しました。しかし、申し出は却下されました。2007年より前に日本で起きた事件はICCの管轄外というのが理由です。加害者が隠蔽し続ける限り、継続中の犯罪行為であるという見解が認められなかったのは残念ですが、国際的な機関に知ってもらえたことはひとつの収穫でした。

帰国後すぐに、北朝鮮と関係する128カ国の外国大使館と全都道府県へ請願文と失踪者リストを発送しました。まずは、特定失踪者の存在を広く知ってもらうことが大切だと考えています。

## 弟が帰ったら、 兄弟3人で囲炉を囲みたい

弟・孝司が突然姿を消したのは、昭和49(1974)年2月24日。横田めぐみさんが拉致される3年前でした。孝司は、東京農業大を出て新潟県庁に就職し、ダム建設に伴う農業用地の整備で佐渡島の農業事務所に赴任していました。拉致されたのは、焼き肉屋で夕食をとり、猟銃免許を返却するため猟友会事務所に立ち寄って、奥さんからのお酒の誘いを断り、300mほど離れた独身寮に帰る途中です。奥さんの話では、孝司が出てすぐに急停車する車の音が聞こえたそうです。それ以降、孝司の姿を見かけた人はいません。

2日後に孝司の職場から実家に連絡があり、私は台風並みの大しけの海の中、佐渡島に渡りました。孝司が暮らしていた独身寮の部屋は、荒らされた形跡もありません。仕事もうまくいっていたと聞き、なぜ、家を出たのかわからず困惑しました。翌日、警察や周囲の住民、総勢200人が捜索活動に入りましたが見つかりませんでした。

明治生まれの母は正直者で、「無断欠勤するような子に育てた覚えはない、こんなことはない、これは何かある、早く佐渡に行って」とせかされ、佐渡に向かいました。母は、孝司の帰りをずっと待っていましたが、無念にも30年前に亡くなりました。

実家は築100年の古民家です。孝司が戻ってきたときのために、囲炉を囲んで食事をした部屋は昔のままに残っています。あれから45年がたち、三男の孝司は72歳、次



男は76歳、長男の私は82歳になりました。孝司が戻ってきたら、子どもの頃のように、三人で囲炉を囲みたいと思います。

## 国際社会と協力して 拉致被害者の即時帰還を

日朝首脳が初めて会談し、拉致被害者5人が帰国を果たしてから今年で17年。被害者、その家族も高齢化。特定失踪者は、政府認定の拉致被害者と異なり、政府の法的な保護や支援がないなか、活動を続けています。被害者を救出するチャンスは何度かありましたが、進展しないまま、時間だけが過ぎていく気がしています。

最も残念だったのは、平成26(2014)年の日朝政府間協議で確認された「ストックホルム合意」でした。この合意によって、北朝鮮に、認定拉致被害者と特定失踪者を区別せず、すべての拉致被害者の再調査を行う特別調査委員会が設置されたのです。しかし、北朝鮮の核実験やミサイル発射に対する日本政府の制裁に反発し、2年後には解体してしまっただけです。

平成26(2014)年3月、北朝鮮における人権に関する国連調査委員会の最終報告書では、少なくとも100人の日本人が北朝鮮に拉致された可能性があるとしていました。

また、平成30(2018)年12月の国連総会では、北朝鮮の人権問題をめぐり、日本人などの拉致を非難し、被害者たちの即時帰還を求める決議の必要性が、圧倒的な支持で採択されました。2019年は、日朝会談も模索されています。最後のチャンスかもしれません。今こそ、国際社会と協力して北朝鮮に圧力をかけ、すべての拉致被害者の救出に力を尽くして欲しいと願っています。

※救う会 ▶ 「北朝鮮に拉致された日本人を救出するための全国協議会」の通称。日本の市民団体のひとつ。北朝鮮による日本人の拉致被害者を救出する目的で、拉致被害者の親族や友人により結成された。